

「妊娠・出産」のスピリチュアリティ

— 「子宮本」の事例から —

立教大学兼任講師 橋迫瑞穂

1 目的

2000年代に入って登場した「スピリチュアル市場」では、「妊娠・出産」に注目する、マクロビオティックや布ナプキン、ホメオパシーなどへの関心の高まりが見られる。書店では「子宮」をキーワードとした図書（以下「子宮本」と呼ぶ）が並べられ、なかにはベストセラーとなるものさえ現れるほどの盛況を見せているのは、その一つの現れといえよう。本発表はこの「子宮本」に注目し、その内容を分析することで、現代日本社会における女性の「妊娠・出産」をめぐる身体観と、そのスピリチュアリティとの結びつきを明らかにすることを目的とする。

2 方法

上記の目的のため、国立国会図書館の蔵書検索システム（NDL-OPAC）を活用して、収蔵図書のなかからタイトルに「子宮」というキーワードを含む図書を検索した（2017.6.6）。これによってリストアップされた図書のうち、2000年代以降に刊行されたものに限定し、医学書や子宮に関わる特定の病気（子宮頸がんなど）を扱った図書は除外することとした。その結果、32冊の図書が抽出された。これらの図書すべてに目を通して記事の内容を精査し、そこにどのような特徴が見出されるかを分析した。

3 結果

分析の結果、「子宮本」に掲載された記事は、次のような5つのグループに分類できることが明らかになった。第1は、「子宮」にかかわる病気や手術、婦人科医の選び方やかかり方など、「子宮」をめぐる基本的なことがらを取り上げた記事の一群である。第2は、「子宮」の健康や「妊娠・出産」に向けた準備のための、いわゆる代替療法などを紹介した記事の一群である。第3は、骨盤まわりを強化するヨガや、カイロや腹巻きで「温める」方法など、自分で「子宮」をケアする方法を紹介した記事の一群である。以上のほか、チャクラやアロマセラピーなどによって「子宮」と“対話”する方法を積極的に取り上げた記事の一群を、第5のグループとしてとらえることができる。以上の5つのグループは互いに無関係に併存しているのではなく、相互に重なり合いながら全体として一つの調和をなしている。

4 結論

「子宮本」は、自らの「子宮」を自分でケアすることを通して、「妊娠・出産」に向き合ったり、「母性」「女性らしさ」の価値を高めたりすることによって、一人の女性としての生き方を確立するよう励まそうとするのが、「子宮本」の基本的な姿勢なのである。「子宮本」において、「子宮」が「聖なるもの」として強調されるのは、そのためにほかならず、ここに「子宮」を中心として身体観とスピリチュアリティとを結びつけようとする姿勢を見出すことができる。

文献

有元裕美子,2011,『スピリチュアル市場の研究』東洋経済新報社.